



Title	対抗書籍見本市 : 書籍市場に対する抵抗運動
Author(s)	戸松, 豊; Tomatsu, Yutaka
Citation	独語独文学研究年報, 31, 192-207
Issue Date	2004-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/26168
Type	departmental bulletin paper
File Information	31_P192-207.pdf



対抗書籍見本市 —書籍市場に対する抵抗運動—

戸松 豊

1. はじめに

1968年の学生運動が収束した後、それに続く1970年代から1980年代にかけて「オルターナティブ運動」(Alternativbewegung)、「オルターナティブ文化」(Alternativkultur)¹と呼ばれる反体制派の潮流がドイツ国内に生じた。これは多方面に及んだ現象で、書籍出版業界もその影響から逃れることはできなかった²。ドイツの書籍出版市場は国際的に高い知名度を有しており、フランクフルト書籍見本市(Frankfurter Buchmesse)の存在からもそのことは明らかである³。「オルターナティブ」を提唱する様々な動きの中で、このフランクフルト書籍見本市に対する対抗運動が書籍出版市場において生じた。それは、当時すでに保守的な動向が顕著となっていたフランクフルト書籍見本市に対するオルターナティブとして、また小出版社の改革運動として結実したもので、「対抗書籍見本市」(Gegenbuchmesse)と現在では呼ばれている⁴。これは1977年から1984年までフランクフルト書籍見本市と文字通り対抗する形で開催され、開催時期や場所も並行するものであった。1970年以降、書籍業界ではいわゆる「ベストセラー戦略」が市場内に蔓延し⁵、文学においても「売れる作家」のための市場が確立し、形骸化してしまっていた⁶。

本稿では、対抗書籍見本市の開催に込められた二つの側面を検討する。第一に、対抗書籍見本市には抵抗と対抗の意味が込められていた。その一方で、抵抗であると同時に、体制側への市場に進出することも目標に掲げられていたと言える。つまり、体制側に自らの要求を提示し、存在感を誇示しようとした一方、体制側の市場で販売経路を作り出し、弱

1 ドイツ語の「alternativ」という語は、「対案(的)」と日本語では訳されるが、現在では「オルターナティブ」という訳語がより一般的であると思われるので、本稿では後者を訳語に採用した。この語は、後に述べるように、反体制的で既存のものに取ってかわろうとするあり方を意味する。

2 当時の出版・書籍業界に全体像については以下を参照。Reinhard Wittmann: Geschichte des deutschen Buchhandels. München 1999; Irmgard Scheitler: Deutschsprachige Gegenwartspoesie seit 1970. Tübingen 2001

3 書籍見本市とは、多数の出版社がそれぞれの出版物を展示し、その販売権や出版権を売買するのが中心的な目標として開催される展示会である。フランクフルト書籍見本市はその代表例であり、中心的地位付けを占める。フランクフルトでは、すでに15世紀に書籍見本市が始まり、18世紀以降の衰退を期にライプツィヒ書籍見本市がその代わりを果たした。しかし戦後の東西分裂により、現在でもライプツィヒでは小規模に開催されているが、中心開催地は1949年にフランクフルトに移された。戦後当初の開催目的は書籍出版業者、卸売業者、小売業者の関係構築と販売促進であったが、現在のように出版権や販売権の会場の売買が主流になった。現在では、日本からも多くの出版社が参加している。

4 1968年の学生運動以来、この「gegen-」という接頭辞は多用され、社会・政治に対する対抗・反対の意味が言葉に付け加えられた。例えば、「Gegenkultur」(対抗文化)や「Gegenöffentlichkeit」(対抗世論)などがある。

5 Heike Sabri: Knef und die Folgen: Bestsellermarketing in den siebziger Jahren. In: Stephan Füssel (Hrsg.): 50 Jahre Frankfurter Buchmesse 1949-1999. Frankfurt a.M. 1999, S.120-129.

6 Hartmut Pankus: Wie Bücher gemanagt werden. In: Heinz Ludwig Arnold (Hrsg.): Literaturbetrieb in der Bundesrepublik Deutschland. München 1981, S.80-91.; Georg Ramseger: Bestsellerlisten – zynische Verhöhnung des Lesers. In: Heinz Ludwig Arnold (Hrsg.): Literaturbetrieb in der Bundesrepublik Deutschland. München 1981, S.92-102.

小出版社が生き残る術を探していたということだ。ここに開催理念と実際の現実の乖離を見ることができる。

ここで、先行研究に言及しておきたい。対抗書籍見本市の存在は、フランクフルト書籍見本市の歴史に関連した記述でわずかに述べられてはいるが、それは概観にとどまり、時代背景や文化的様相を十分に踏まえた研究とは決して言えない⁷。また、出版史、書籍販売業の歴史においてもわずかに言及されている程度であるが、ここでは小出版社との関連のみであり、対抗書籍見本市の実態を細かく述べた部分は皆無に等しい⁸。従って、本稿で問題となる開催意義については具体的な記述はほとんど無いと言って差し支えない。この不十分な点を、対抗書籍見本市の状況を報じた新聞記事、機関紙（ドイツ書籍出版業組合発行）、書籍情報誌を手がかりに解消する必要がある。

2. 対抗書籍見本市

2. 1. 体制 vs オルターナティブ

ドイツでは、第二次世界大戦の荒廃の後、人々の間には社会を復興させようという動きが非常に著しかった。そのような動きは、政治、文化、経済など多方面に渡る非常に大きな、社会全体に及ぶ動きであった。その反面、再興の過程は時間を経るにつれ、多くの歪みを生み出していったのも確かである。多くの人々に将来に対する楽観的な考えだけが広まり、60年代後半や70年代前半ほどそれが顕著だった年代は無いとも言えるほどであった⁹。革新の欠けた社会情勢は、キリスト教民主同盟と社会民主党による「大連合政権」（Große Koalition）の誕生により、その実情をはっきりと人々に意識させるに至った¹⁰。このような情勢は、1968年の学生運動を引き起こす契機となり、そして、この運動が終結した後の70年代前半には、改革の潮流が渦巻き始めたが、実際には大きな保守回帰の流れも生み出した。「この政治的、社会的な変化は、保守的な観点から『流れの転換』として歓迎されたが、文化的知識人の大部分にとって、『第二の復古体制』を示す重大な特徴を表すものであった¹¹」。このような政治的、社会的情勢が孕む矛盾に対して怒りの声を上げる社会運動や住民運動が、ドイツ全土に拡大し、多種多様な対案が提唱されていくことになった。1960年代後半には、フェミニズム運動、環境運動、学生運動、地域運動、平和運動などが普及し始め、国内に広まっていた技術万能主義に対する批判、市民社会の自立性、自

7 Stephan Füssel: >>Gegen die Geschäftemacherei des Bestsellerbetriebs<<: Die kurze Phase der Gegen-Buchmesse 1977 bis 1984. In: Stephan Füssel (Hrsg.): 50 Jahre Frankfurter Buchmesse. Frankfurt a.M. 1999, S.115-119.

8 Reinhard Wittmann: Geschichte des deutschen Buchhandels. München 1999, S.431.

9 Schildt, Axel: Die 60er Jahre – eine Dekade im Schatten des Mythos von '68. In: Estermann, Monika, Lersch, Edgar (Hrsg.): Buch, Buchhandel und Rundfunk - 1968 und die Folgen. Wiesbaden 2003, S.9-29. ここでは、26頁を参照。

10 当時、人々は大連合政権を改革推進に積極的だと見なしていた反面、それは社会統制や全体主義化に通じるのではないかと危惧していた。1968年6月24日に可決された緊急事態法（Notstandsgesetze）は、メディア統制によって支えられる全体主義国家の前段階を生み出すのに好都合と見なされ、そのような危険を議会外反対派（APO）は、「新たな33年」（neues '33）というスローガンによって非難した。

11 ヤン・ベルク（編著）『ドイツ文学の社会史（下）』法政大学出版局 1989年 1246頁参照。

己決定に主眼をおいた運動が展開していた。

それに続く1970年代後半には、いわゆる「オルターナティブ・シーン」(Alternativszene)が生じた¹²。これは、体制(Establishment)や社会で確立した(etabliert)制度とは異なるあり方を希求する社会運動やサブカルチャーを包括する概念で、特にそれらは1980年代以降「新しい社会運動」(Neue Soziale Bewegung)という名称で呼ばれるようになり、広く社会に浸透し拡大し始めた¹³。ドイツの著名な政治学者であるクルト・ゾントハイマー(Kurt Sontheimer)は次のように述べている：

オルターナティブ運動の支持者は、確立したシステムが塞いでいないニッチをうまくいけば確保することができたし、またそこから信号を発信しようともしてきた。いずれにせよ、少なくとも彼らは、自らが持つユートピアの衝動を念頭において、長い間活動的であろうとしてきたのだ¹⁴。

この運動では、広く蔓延していたプロトタイプ志向や権力志向の社会に対し、中心的、体制的なものとは一線を隔した個性、独自性、自由といった価値観が大いに重要視された。これらの新たな価値観がもたらした余波は、現在にも強く及んでいる。オルターナティブ文化の活動家は、様々な領域で多彩なテーマを運動の実現すべき課題として掲げ、公民権運動、人権運動、女性解放運動、平和運動、環境運動、自己解放運動など非常に多岐に渡る分野で彼らの目標を具体的に行動で表していった。対抗書籍見本市は、書籍出版業者だけでのものではなく、このような社会運動の拡大のための場でもあった：

即席で造られた売店は、緑の環境保護団体、バラ色のホモセクシャルグループ、黒の無政府主義者、赤の社会主義者、色鮮やかな反原子力グループなど、色とりどりであった¹⁵。

オルターナティブなテーマを出版物の軸とした書籍出版関係者と社会運動が互いの交流と絆を強める場、つまり両者のフォーラムとして開催されたのが対抗書籍見本市であった。これらの運動や文化を規定する鍵となるものは、グループが持つ自己理解であり、多くの場合、それは左派、左派リベラルというイデオロギー的色彩を帯びたものであった。また、体制や主流派とは異なる、別個のものを大いに評価しようという姿勢がその前提となつて

12 Manfred Görtemaker: Geschichte der Bundesrepublik Deutschland. München 1999, S.641.

13 Dieter Rucht, Barbara Blattert, Dieter Rink: Soziale Bewegungen auf dem Weg zur Institutionalisierung; Zum Strukturwandel >> alternativer << Gruppen in beiden Teilen Deutschlands. Frankfurt.a.M. 1997, S.12.

14 Kurt Sontheimer: Zeitenwende?: die Bundesrepublik Deutschland zwischen alter und alternativer Politik. Hamburg 1983, S.206. ここでのニッチとは、生物学の用語で生態的地位と呼ばれている概念を指す。個々の生物種が自然界において占める地位や生物的環境の中の位置を意味する。つまり、ここでは、確立した社会制度がカバーしていない領域、分野のことをさす。オルターナティブ文化においては、周辺のテーマが持つ意義が特に強調された。

15 Frankfurter Rundschau 9.10.1980: Vierte Frankfurter „Gegenbuchmesse“; Fliegenpilz, Polterzwerg, Höllenzeit.

おり、市民的、理想主義的な文化概念に対する反対行動でもあった¹⁶。

その形態は千差万別であり、一概にはその多様性について言い表すことは出来ない。個々人の生活様式に始まり、ここで中心的話題になる出版、ジャーナリズム業界はもちろんのこと、婦人運動や環境運動もそのような枠組みに入っていた。

この改革運動がもたらした成功の一つは、環境保護運動の中で結成された「緑の党」(Die Grünen)が、政治の世界においてもその主張の場を獲得したことである。1983年3月6日に緑の党が連邦政府にその議席を獲得して以来、その運動は単なる社会運動であるだけでなく、社会の中で確立も果たした。だが、この事実は本稿で扱う問題点と同じく、二面性を持っているといえる。つまり、体制に対して自らの主張を貫く機会を手に入れた反面、体制側の一員になってしまったということである。

2. 2. 対抗書籍見本市の目標

対抗書籍見本市は、その起源を1968年に遡ることができる。この年、フランクフルト書籍見本市でも学生運動に賛同したいくつかの出版社によるフランクフルト書籍見本市会場のボイコット運動、学生による会場での座りこみ(sit-in)が行われ、それと並行する形で初めて対抗書籍見本市は開催された。左派作家が当時完全に市場化、商業化してしまっていた書籍出版業界との闘いのために開催し、新聞や雑誌、ドイツ書籍販売業組合、文学生産の民主化を訴え¹⁷、そして、「市民的出版社—ローヴォルト、ハンザー、ヴァーゲンバッハ、ハインなど—から離れろ」(Weg von den bürgerlichen Verlagen, den Rohwohlt, Hansers, Wagenbachs, Heynes usw.)というスローガンのもとで、小出版社の組織化を進めようという試みがなされた¹⁸：

AGAV主催の対抗書籍見本市は、60年代の学生運動が行った対抗書籍見本市の伝統を受け継いでいます。しかしながら我々の綱領の方が、以前にも増して広まりを見せており、また偏った政治的内容に限定されてもいません。けれども、目指すところは先の対抗書籍見本市と同じです。つまり、ドイツ書籍出版業組合の書籍見本市のオルターナティブであろうとしている点です¹⁹。

二つの対抗書籍見本市(1968年、1977-1984年)の共通点は、あくまでも体制に対し

16 1968年の学生運動の際、『啓蒙の弁証法』(Dialektik der Aufklärung)が特に学生の間で議論の対象にされたことをここでは想起しておきたい。この著作の中でアドルノは、アメリカの大衆文化の広がりや「大衆欺瞞としての啓蒙」と批判した。彼の文化産業批判論に対しては、古い文化貴族主義に基づく文化ペシニズムではないか、サブカルチャーが持つエネルギーを見落としているのではないか、という批判が特にこの時向けられた。学生運動に参加した学生の間では、ある意味で反対運動の批判的としてこの本は普及した。オルターナティブ運動においても同様に、市民的文化概念は攻撃的の的にされた。

17 Hermann Glaser: Kleine deutsche Kulturgeschichte von 1945 bis heute. Frankfurt a.M. 2004, S.260.

18 Stephan Füssel: >>Gegen die Geschäftemacherei des Bestsellerbetriebs<<: Die kurze Phase der Gegen-Buchmesse 1977 bis 1984. In: Stephan Füssel (Hrsg.): 50 Jahre Frankfurter Buchmesse. Frankfurt a.M. 1999, S.115-119. ここでは、115頁を参照。

19 Börsenblatt 15.9.1978: Mehr als sechzig Kleinverlage; Informationsstand auf der »großen« Messe.

ての対抗であり、商業化した書籍出版市場と対決することを理念として掲げていた。そのような目標のもとで、確立した市場には欠けていたオルターナティブ文化ならではの斬新なテーマが模索された。フランクフルト書籍見本市の開催の祝典の際には、書籍出版業者が担う文化的使命が強調されるのが常ではあったが、実際例えば書籍取次販売業者（Sortiment）は、大部分がひどく怠慢で保守的であった。彼らは、例年通りの取引方法を敢えて変えることもなく、本来持つべき使命感を感じさせる動きもなかった。それよりも、出版社財閥のセールスマンから、「いわゆるベストセラーと呼ばれている商品をまとめて言葉巧みに売りつけられる方を選ぶ」ことを安易に受け入れていた。使命感を喪失した市場に対する改革の運動が小出版社の結束を導いたのだ²⁰。

対抗書籍見本市の当初の開催目的は、作家だけでなく出版社も当時の商業化した書籍出版市場に対して距離をとることにあった。確かにフランクフルト書籍見本市では参加料が大きな負担になっていたという事情もあったのだが、オルターナティブ作家が書き、出版するものを通して、彼らの意識を具体的に行動で表すことが重要であったといえる：

小出版社が大きな見本市を避ける動機は、もちろんコストの問題だけではない。強力な資本力を持ったメディア巨人の浅薄な文学経営から、目にはっきり見える形で、つまり空間的にも内容的にもはっきりと距離をとることが、主として彼らには重要なことなのだ²¹。

「オルターナティブ」という理念の下でフランクフルトの会場に集結した参加者や出版社や書籍販売業者は、それぞれが様々な意識を持って展示に加わった。ここで注意しておきたいのは、展示販売されたものには特別な規制がなく、開催理念に沿うものであれば問題は特に何もなかったということだ。「対抗書籍見本市は、フランクフルト書籍見本市に対する『オルターナティブ』を捜し求めている人全員に開かれていた²²。」本や雑誌のみならず、食べ物やトランプ、音楽のテープなどもオルターナティブと称して販売されていた。また、入場料はわずか 99 ペニヒで、展示されている本は売買の対象であった²³。

1977 年から 1984 年まで行われた対抗書籍見本市は、経営基盤が確立した出版社とは異なる、様々な小出版社が主体となって開催された書籍見本市であった²⁴。作家、小出版社、左派書籍販売業者が一体となって組織化することで、互いの経営網を確立することが最初の段階で目論まれ、これは 1975 年の書籍見本市で「小出版社作業共同体」（ADKV:

20 Frankfurter Rundschau 10.10.1980: Eine Mehrheit, die kleine ist: Kleinere Verlage artikulieren sich auf Buch- und Gegenbuchmesse.

21 Die Tageszeitung 8.7.1977: Messe der Mini-Pressen.

22 Füssel, S.116.

23 当時フランクフルト書籍見本市では、現在と同様に展示されている書籍の売買は一切行われず、もっぱら出版権や販売権の交渉だけが行われていた。そのため、出版市場において力を持たない小出版社や作家は必然的に市場外から取り残された存在とならざるを得なかった。それに対する非難と市場開拓の必要性が、対抗書籍見本市を通して具現化された。

24 オルターナティブ書籍出版業、特にオルターナティブ小出版社については以下を参照。Helmut Volpers: Alternative Kleinverlage in der Bundesrepublik Deutschland. Göttingen 1986.

Arbeitsgemeinschaft der Kleinverlage) の結成により実現され、世にその存在が公表された：

さしあたり、我々体制外の人間 (Unangepaßten) が持つ内容的、経済的、組織的要求が文学市場全体に広まるように表明することが重要であった。それは、逆説的に聞こえるかもしれないが、市場の流通形態にさらにもう一步順応することを意味する。いくらかのサブカルチャー作家や出版社がほんの数年前に実践したのと同じように市場を拒絶することをもはや意味するのではない。そうではなく、市場と自分たちの要求を向き合わせ、そこに登場することを意味するのだ²⁵。

上で述べた組織は、77年には、「オルターナティブ書籍出版社・作家作業共同体」(AGAV: Arbeitsgemeinschaft alternativer Verlage und Autoren) に名称を変え、対抗書籍見本市の開催の主体組織になった。そして、「オルターナティブ書籍出版社作業共同体の対抗書籍見本市カタログ」(Katalog zur Gegenbuchmesse der Arbeitsgemeinschaft Alternativer Verlage) と「オルターナティブ書籍出版社在庫目録」(Verlags-Verzeichnis lieferbarer alternativer Bücher) を作成することで、どのような書籍出版業者、左派書籍販売業者が存在し、どのような作家がどのような内容の作品を出版しているのかをこのハンドブックを通して世間にアピールしようとした。これに加わった多くの場合、副業ないし趣味として出版活動を行っている書籍出版業者は、経営を度外視した零細企業といってよい。さらに、必ずしも企業、会社の形態をとっていたとは限らない。

しかし、あくまでも彼らが抱いた対抗意識は決して確立した見本市と全面対決をしようという意図に基づいていたわけではない。つまり、対決であると同時に、市場への進出が目的とされていたのだ：

「我々は、書籍見本市と対決しようとしているのではありません。」と、AGAV のスポークスマンの一人で、ハンブルクの作家ペーター・エンゲル (Peter Engel) は述べた。むしろ作業共同体とその見本市はドイツ連邦共和国のオルターナティブ出版社のためのフォーラムであろうとしているのです。公式の書籍見本市では、作家たちは端に追いやられています、そうエンゲルの同僚でカールスルーエの作家で出版人のノルベルト・ネイ (Norbert Ney) は言い加えた²⁶。

対抗書籍見本市の存在意義は、確立した書籍見本市への真っ向からの対立を目標としたのではなく、オルターナティブな理念を支持する少数派がまとまり合って、その存在を市民的な市場に対して少しでも拡大していくことが重要とされた。だが、これは決して確立した市場に迎合する意図によるのではなく、市場外の出版社や作家の結束により、市場に

25 Christoph Schubert: Alternative Literaturszene in der Bundesrepublik Deutschland. In: Heinz Ludwig Arnold (Hrsg.): Literaturbetrieb in der Bundesrepublik Deutschland. München 1981. S.126-141. ここでは、135頁を参照。

26 Ruhr-Nachrichten 29.9.1977: „Gegenbuchmesse“ der Autoren.

は見られないテーマの強調、対抗運動の展開によって新風を巻き起こそうという目論見があったといえる。この様な目標に従って、様々なプログラムを持ったフォーラムが77年から84年の間、開催されたと言える。

しかし、本稿で扱う対抗書籍見本市(1977-1984)は、当時の時勢と同じく衰退せざるを得ず、現実的な面でも理念と齟齬をきたしてしまった結果、1984年を最後にその開催意義を消失してしまった。社会全体の流れでいえば、保守体制への回帰、緑の党に見られる社会運動のひとつの大きな形での成果の実現により、出版業に携わる人々が行ってきた抵抗運動は別の運動にその後を託す結果となったと言える。では次に、このような二面性を裏付ける体制側とオルターナティブ側の市場を見てみることにする。

2. 3. 「体制」—出版業界と書籍市場

文学を芸術として、また政治的アンガジュマンの手段として捉える作家や読者と、それを実際に出版する出版社側との意識には当然のことながら一定の断絶が存在していることは言うまでもない：

我々は、商業主義的出版業界の蚊帳の外で、なおも実験的試みを行っている文芸創作に注意を促したいのです。…(中略)作家は商品の製作者になり、出版社は経営者になってしまいました²⁷。

書籍出版業界では商業主義が蔓延し、書籍は単なる商品であり、作家はその製作者にすぎなかった。ある文学作品が芸術的に優れているからと言ってベストセラーになるわけではないし、政治的発言力を有しているからといって出版社の経営を支えるほどの売上をもたらすとは言えない。本が持つ美学的価値と書籍市場を同じレベルで考えることは決してできないわけだ。70年代に出現したオルターナティブ出版物、文学、書籍販売業者は、このような書籍市場の形態を反映した現象であり、彼らはむしろ本来の本が持つ美学的側面をより強調していたといえよう。

当時ドイツでは、ある一つの出版社財閥が巨大な影響力を書籍出版市場に及ぼしていた。およそ40の読書サークルをはじめ、書籍出版市場に関連する業種(例えば、書籍出版社、ブッククラブ、購読者クラブ、印刷所など)を軒並み支配下においていたベルテルスマン財閥である。市場の支配者であったこの財閥と共に、学生運動以来オルターナティブの人々から痛烈に非難を受けたのが、特に新聞雑誌関連で巨大な力を持ち、煽動的な論調を特徴としたシュプリングァー出版社であった。このような市場の実態は、体制として認識されていた：

ドイツ連邦共和国(旧西ドイツ)で、例の日刊紙、週刊誌、月刊誌の全てを出版しているのは、結局のところ今なお80から100人の人間に過ぎない。それは、彼らこそが市場では強者だから

27 Börsenblatt 15.9.1978: Mehr als sechzig Kleinverlage; Informationsstand auf der »großen« Messe.

だ。彼らは、徐々に一步一步、もはや競争力のない弱小出版社を買収し尽くしていくのだ。もちろんそのことを言い表すのに、ドイツ語には肯定的な意味合いで、とても見事な概念がある。つまり、**合併 (Fusion)** と凡そ一般的に呼ばれている²⁸。

70年代に起きた新たな文学的潮流は個人の内面性を作品に表わすことが主流となっていた。これは、60年代の文学の帰結であった。50年代に続き、60年代も近代化の流れが著しくあらゆる領域で推し進められ、60年代前半以降の文化の潮流で、特に目立つ特徴は文筆家の政治参画であった²⁹。学生運動の際には、作家たちは文学を政治的アンガジュマンの一つとみなし、運動との連帯を図りながら政治的対案を模索していた。しかし反体制運動の後に残ったものは、運動の停滞、敗北、消滅によって生じた文学に対する空虚感だった：

葬列は、ほとんど何も目新しいことが見られない多くの理論の砂塵を残した。文筆家は文学の終末を祝った。詩を作ることが不可能である、ということを詩人が自他両者に対し証明している。批評家は、批評の決定的な死を称えて歌う³⁰。

ハンス・マグヌス・エンツェンスベルガー (Hans Magnus Enzensberger) は、このように「文学の死」を述べている。こうした芸術や文学の無力感が意識されていくに従い、70年代の新たな時代の潮流は個人の内面に目を向けた創作であり、またそのような文学であった。ヴェトナム戦争の終結と共に、体制への幅広い批判や議論が起り、体制とは異なる新たな社会制度の模索と個人への回帰がその結末として広まった³¹。

芸術、文化、文学といった分野においては、この70年後半から80年前半の時代に「新しい主観性」(Neue Subjektivität) が大きな位置を占めるに至った³²。つまり、この言葉それ自体からも分かるように、主観や自己にその表現の力点が置かれ、例えば文学においては書くという行為がすなわち自己表現であり、自己開放、自己拡大に通じるとみなされた。この用語は、非常に主観的かつ自己中心的な創作意識を学術的に名称付けたものであるといえる。ヨースト・ヘルマント (Jost Hermand) が述べているように、女性運動、環境運動、平和運動を中心とした社会運動ですら、作家の中に流行していた自己や個性を中心にする創作姿勢にほとんど影響を与えることができず、様々なイデオロギーを掲げた女性運動や、緑の党に代表される環境運動があったとはいえ、結局文学的な連携を生み出す基礎となる文化的アヴァンギャルド構想を展開するグループが結成されることはなかつ

28 Norbert Ney (überarb. von Rainer Breuer): die alternativpresse in der brd – ein beispiel für GEGENÖFFENTLICHKEIT. In: Katalog zur Gegenbuchmesse der Arbeitsgemeinschaft Alternativer Verlage + Autoren: VLAB: Verzeichnis lieferbarer alternativer Bücher. Trier 1978, S.225-233. ここでは、225頁を参照。

29 Schildt, S.21.

30 Hans Magnus Enzensberger: Gemeinplätze. In: Kursbuch 15 (1968) S.187.

31 Irmgard Scheitler: Deutschsprachige Gegewartsprosa seit 1970. Tübingen 2001, S.67.

32 新しい主観性については、Scheitler, 2001. を参照。

た³³。これらのことから分かるように、文学だけに限定されることなく書籍出版業全体から見ても、個性を重んじるあまり社会全体に還元される機能や強い発言力を伴った文学や創作活動がいかに希薄であったかが明らかである。

このような実態に伴って、1970年代のはじめには、それまでの販売戦略とは異なるベストセラー・マーケティングの時代が始まった：

俳優、サッカー選手、クイズ番組の司会者、指揮者、著名な経営者たちは、文章が書けなくても何の問題もない。出版社の社員や編集部のアシスタント達が、いわゆるゴーストライターとなつて、その肩代わりをしてしまう。重要なことは、表紙や広告に有名人の名前が書かれてあって、その名前や読者の注意を引きつける他の人物名が、ベストセラーとなるための見事なきっかけとなるようにできる限り働きかけることだけだ³⁴。

この現象は、書籍出版業界全体に拡大し、当然のことながらフランクフルト書籍見本市においても展開された。書籍見本市では、著作権、販売権の売買が主流になってしまつていたため、会場でベストセラーの権利の売買が激しく行なわれるようになっていた。会場内に来ている世界中の出版業者はそのベストセラーに注目する事になり、世界中でそれは話題を集め、著名作家や著名人物が書いた作品は、ほんの数ページのあら筋、筋書きの段階で取引されるという倒錯した現象が一般化し始めていた。その販売高は書籍市場全体の5%を占めるに過ぎなかったとはいえ、出版社には大きな意味を持った：

一冊のベストセラーは、大きな大衆出版社にとって会社の存続のために必要な一つの売り上げ構成要素である。…（中略）一冊のベストセラーによって出版社は、その存在感を本屋で保つことが出来る。それは、全販売高に有利に作用する。一冊の本の成功は、副次的権利（ブッククラブ版やポケット版の出版、そして映画、テレビ放映権に対するライセンス）によって、取引に有利な条件を生み出す。なぜなら、出版社は本の売り上げだけではとうてい生き残ることが出来ないからだ³⁵。

フランクフルト書籍見本市でのベストセラー戦略の発端は、1970年に販売されたある一冊の本に原因をたどることが出来る³⁶。1970年にヒルデガート・クネフ（Hildegard Knef）の自伝『贈られた駄馬』（『Der geschenkte Gaul』）が発売された³⁷。フリッツ・モルデン（Fritz Molden）の出版社が書籍見本市でこの本を大々的に売り出すために、それまでには見られ

33 Jost Hermand: Die deutschen Dichterbunde; von den Meistersingern bis zum PEN-Club. Köln 1998, S.323-325.

34 Norbert Ney (überarb. von Rainer Breuer), S.226.

35 Ebda, S.90.

36 Heike Sabri: Knef und die Folgen.; Hartmut Pankus: Wie Bücher gemanagt werden.を参照。

37 25万マルクの原稿料、さらに同額の広告予算がこの本のために算出された。これは、それまでの書籍出版業界に例がない破格といえる金額であった。

なかったキャンペーン活動を非常に大掛かりな形で行ったことは有名である。この本の出版は1970年8月であったが、「プロモーション・キャンペーン」は1月からすでに始まっており、これはそれまでのドイツのフランクフルト書籍見本市には見られない現象であった。このキャンペーンでは、「プロモーション・バック」が書店に配られた。その中には、試読見本、作者の歌や話を録音したレコード、サインはがきが入っていた。しかし、このキャンペーンの段階では、まだ作者は原稿執筆中であり、雑誌、書籍情報誌、ラジオやテレビではすでに宣伝が行われていた。かつてなかったこのようなキャンペーン活動は、次の年には他の出版社によって同じように模倣されていくことになった。まさに対抗書籍見本市が開催されていた1980年の段階では、著名な作家やベストセラー作家は契約の段階で宣伝費を確保し、さらに本の装丁、カバーのデザイン、宣伝構想、宣伝活動に対しても共同発言権を確保するまでに至っていた。そして「プロモーション・ツアー」も一般化し始めていた³⁸。

したがって、このような市場の実態に対し、小出版社の抵抗運動として結実した一つの現象が対抗書籍見本市であったわけだ。ここでは端的な形でベストセラー市場に触れたが、このような市場現象はこの70年代以降、特に広く普及し、この経営重視の書籍市場とつながっていた作家たちに対する批判が、小出版社や名もない作家たちの手によって対抗書籍見本市という形で噴出したと言える。戦後のドイツ文学の担い手であった「グルッペ47」(Gruppe 47)の中心的なメンバーであったハインリヒ・ベル(Heinrich Böll)やギュンター・グラス(Günter Grass)そしてマルティン・ヴァルザー(Martin Walser)なども当然その批判の対象であった。ベストセラー戦略に加担したとは言えないまでも、彼らの発言はこのような書籍市場体制があったからこそ実現したのであり、この意味では体制側の作家と見なされる存在であったといえよう。

2. 4. 「オルターナティブ」—出版業界と書籍市場

70年代後半の出版書籍市場は、すでに新鮮味を失い墮落した状態に陥っていた。これは、「ますます広まる『本の洪水』による文学の質の低下を非難」³⁹する動きが生じ、文学に限らずあらゆる面において、書籍市場では商業主義が蔓延し、書籍の商品化が顕著になっていた。文学においては特にその美学的側面を無視する傾向が強まり、商業的ベストセラー戦略の影響を強く受けるようになっていたことから、そのことは明らかだ：

しかし、文学創作だけで実際に生活している人がどれだけいるでしょう？ベルやグラス、その他も含めてせいぜい五人くらいでしょう。それ以外の作家は、どのみち新聞や雑誌への寄稿を収入の一部とせざるを得ません。だが私たちは、そのような状況が改善され、できるだけ多くの作家が自ら書いた著書によって生活できるように当然働きかけるつもりです。まあ、将来的には報酬

38 Pankus, S.80-81.

39 Stephan Füssel: Chronik 1980, S.202. In: Stephan Füssel (Hrsg.): 50 Jahre Frankfurter Buchmesse. Frankfurt.a.M. 1999

の点で、確立した出版社よりも有利に立つことが我々の目標であるといえるでしょう⁴⁰。

確かに、ドイツでの著名な作家たちは、文学を通して政治的アンガジュマンを果たし、時には社会に対する挑発や社会情勢への痛烈な批判を行ってきた。しかし、ここで注意しておきたいことは、彼らはそれにもかかわらず、商業主義的な書籍市場に依存し、またその市場を通して自らの本を出版していたという事実である。対抗書籍見本市に見られるオルターナティブ運動では、このような著名作家の実態が批判の対象にもなった。

文学という領域においては、本来必ずオルターナティブな文学が存在し続けていると言えるのかもしれない。あらゆる革新的な作品を世に送り出した作家も、自らの時代の風潮とは一線を画した新たな動きを探求したはずだからである。フリッツ・J・ラダッツ (Fritz J. Raddatz) は、週刊新聞『ツァイト』の中で、対抗書籍見本市での感想を次のように述べている：

我々が今日「教養財産」と呼ぶものや、カノンとして受容されているものの多くが、どのようにかつて (パウンドやジョイス、ジュネやミラーがそうであったように) 同じように始まっていたのかを思い起こさねばならない。それをサブカルチャーとか対抗文化と名づけるべきか私には分からない。私はそれを是が非でも「並行文化」(Nebenkultur) と名づけようと思う。(滑稽と思われるくらい発行部数が少ないため、納得できてしまうような) かなりのコスト高で商品は作られ、この場で売られている⁴¹。

現在の我々にとっていわゆる「教養」としての文学作品や、文豪と言われる作家が世に残した作品は、本来確立したものへの抵抗と挑戦の意識から始まったと言えよう。また、対抗書籍見本市で販売されているものは、いわゆる市民的な関わりとはあくまで距離を置いた独自性こそが重要視され、対抗書籍見本市に限らず、確立した市民的な文学や市場とは一線を画することが目標であったと言える。自由な発言と対抗の手段として、少数派による連帯と、低い発行部数によってもたらされる高い生産コストの代価としての自己主張の場が形成されていたのだ。

ドイツ国内の出版社の書籍販売業組合である「ドイツ書籍出版業組合」(Börsenverein des Deutschen Buchhandels) は、その機関紙 (Börsenblatt für den deutschen Buchhandel) において次のようにそのような小出版社の存在を評価している：

小出版社—これは、一義的な概念ではない。つまり、必要最小限の綱領と売上高を持つ出版業者のことである。1〜3人が作業できる程度の仕事場があり、文学的あるいは政治的問題に取り組

40 Frankfurter Rundschau 12.10.1977: Klein bleiben, aber gemeinsam größere Wirkung erzielen; Ein Gespräch mit Peter Engel und Norbert Ney über die „Alternative Gegenbuchmesse“ und die Zukunft der Kleinverlage.

41 Die Zeit 19.10.1979: Habichtskraut und Himmelschiff; Momentaufnahmen der Gegenbuchmesse Momentaufnahmen der Gegenbuchmesse.

んでいる。しばしば生活にとって最低限すれすれの状態で出版活動を行っている。

小出版社—これは、出版社の特性を表す名称ではない。というも、多かれ少なかれ偶然に自分自身あるいは他人のものを出版するに至った専門外の職業からの依然素人のような新入りがいるからだ⁴²。

体制側の市場は、小出版社の存在をあくまでも低い位置づけで捉え、雑種雑多な集団と見なしていたといえよう。確かに、小出版社は経営基盤が乏しく、経営、流通システムが曖昧であり、優れた販売戦略を持っていたわけでない。それゆえに、市場の人気に左右されない独自のテーマに沿った内容の書籍や雑誌の出版、販売を展開することでその存在意義を維持していたといえよう。自己自身の表現の場として、つまり自分自身の主張を述べ、仲間同士の連帯を強める場として出版活動を行っていたのだ。

文学と同様に大きな出版業界を占めたのが新聞や雑誌といった情報媒体である。市場に占める割合がいくつかの出版社に集中する出版システムが出版業界に成立した一方で、1968年以降、オルターナティブ小出版社が特にそのようなシステムから際立った存在になり始めた⁴³。全国紙にはない、地元のテーマを重視した地方新聞や女性運動と結合したフェミニズム関連誌をはじめ、様々な出版物が世に出され⁴⁴、活動家や支援者への情報提供、新聞や雑誌の購読者への情報提供が行われた：

日刊紙のオルターナティブとは、色々な情報の拡大だけに限定されるものではなく、新聞が違った方法で作られるということ誰もが実感できるものでなければならない。新聞にとって、そのことは新たな民主的な構造の発見に等しい。住民運動や支援団体のネットワークは、全ての地域に広がっていなければならない、最大限多くの分野を包括するものでなくてはならない。多くの住民運動やグループの間での議論が、そこでは行われなければならない⁴⁵。

1968年の学生運動以降に広く普及したのはオフセット印刷機であった⁴⁶。このことは、反体制運動の組織化と活性化を引き起こすきっかけになり、更には新しい社会運動のネットワーク化、つまり抵抗運動や文化ネットワークの拡大とその基盤の確立を促した⁴⁷。このことに関してホルシュタインは、『対抗社会』(»Gegengesellschaft«)の中でオフセット印

42 Börsenblatt 27.10.1974: Schatten-Dasein?: Kleinverlage und die Messe

43 Wittmann, S.430.

44 Jost Hermand: Die Kultur der Bundesrepublik Deutschland. München 1988, S.517. によれば、1980年には、西ドイツで自らを「オルターナティブ」と称する168の地方紙新聞、10の地方雑誌、さらに30のフェミニズム関連誌、28の青少年向け雑誌、32の環境新聞、ホモセクシュアル問題を扱った4紙が存在していた。

45 Projekt Tageszeitung. In: Katalog zur Gegenbuchmesse der Arbeitsgemeinschaft Alternativer Verlage + Autoren: VLaB: Verzeichnis lieferbarer alternativer Bücher. Trier 1978, S.233-238. ここでは、235頁参照。

46

47 オルターナティブ出版に関しては、特に以下の文献を参照。Christina Holtz-Bacha: Alternative Presse. In: Jürgen Wilke (Hrsg.): Mediengeschichte der Bundesrepublik Deutschland. Bonn 1999, S.330-349.

刷技術の優れた情報伝達作用を次のように述べている⁴⁸。オフセット新聞は、地域の枠を超えた多様な人々に、運動の現状と意義を伝え、日常生活に及ぶ実践的な指示を与えた。それと同時に、対抗的な社会イメージを論じたオフセット新聞は、国民的＝統合的なマスメディアが黙殺した情報を暴き出した⁴⁹。

このようなオルターナティブな情報伝達媒体がもたらす効果は、商業主義的な書籍出版市場には見られない購読者や読者との連帯感を強固にし、体制派のマスメディアに批判を行う機運を高めた点に見てとることができる。運動の伸展を促したメディア媒体の中でも特に言及すべきなのは、1978年にドイツ初のオルターナティブ日刊紙として登場した『TAZ』(»die Tageszeitung«)である⁵⁰。この新聞は、現在ではすでに全国区において確立を果たした新聞であり、今なお独自の論調、内容で多くの読者の支持を得ている。わずかな最盛期の後、非常に多くのオルターナティブな新聞や雑誌のうち、結局生き残ったものはわずかであった一方、オルターナティブ書籍出版業社は驚くほど増加し続け、不十分で素人じみた専門性と、経済効率を重視する市場への彼らが抱いていた反感は、逆説的に思われるがサブカルチャーからの反響と支持を得た⁵¹。

様々な目的を持って勢力を拡大した活動グループは、当時の出版物には見られない新鮮なテーマを掲げており、独自の視点に基づく目標を実現するために一種の機関紙として新聞や雑誌を発行していた。しかし、緑の党の躍進に伴い彼らが取り上げた諸問題は、主流派の新聞や雑誌でも話題にのぼり始め、活動家は次第に窮地に追い込まれるようになった。なぜなら、そのことは彼らの存在基盤を突き崩すことを意味するからである。これは、書籍出版業に対しても当てはまることであり、その具体例を次に対抗書籍見本市を手がかりに見てみることにする。

2. 5. 対抗書籍見本市の成果

1970年代半ば以降、オルターナティブ出版社の多くが、製品の質を向上させ、新たな販路を開拓するために、彼らがタブー視した既存の書籍出版市場へ次第に同化する現象が一般化し始めた⁵²。対抗書籍見本市は、上でも述べたように、小出版社やオルターナティブ運動、社会運動が結束する場であり、互いの交流の場を作り出し、運動促進、拡大の役割を果たした。多くの保守的な、出版関係者もこの見本市を訪れ、対抗書籍見本市が世に知られるにつれて、両方の見本市に参加する出版社や書籍販売業者も増加した。実際にはこれによって、多くの出版社が確立した市場との接点を見出す機会を手に入れ、また同時に流

48 Walter Hollstein: Die Gegengesellschaft: Alternative Lebenstromen. Reinbeck 1981, S.70.

49 佐藤卓己 「国民化メディアから帝国化メディアへー文化細分化のメディア史」 S.145-184. (野田宣雄 (編著)『よみがえる帝国ードイツ史とポスト国民国家』 ミネルヴァ出版 1998 所収) ここでは、160頁を参照。

50 »die Tageszeitung«は、ドイツ語では『日刊紙』を意味するが、»TAZ«のように省略した名称がドイツでは一般的であり、これに該当する日本語はないので、ここでは»TAZ«という表記を使用することにする。

51 Wittmann, S.431.

52 Wittmann, S.432.

通経路の拡大という意味においては成功を収めていった。いわゆる小出版社という惨めなその立場から、次第に市場に対して確立を果たしていき、設備の充実と売上高の伸びを獲得した。これは、小出版社の販路拡大という面では、対抗書籍見本市がもたらした功績の一つである：

ここで、次第に小出版社のいくつかが陥った最初のジレンマが明らかになる。極端なアウトサイダー（Außenseiter）自身が次第に確立し始めたということである。もはや手動印刷機のもとに立つのではなく、自らの印刷所を持ち、発行部数と売上高を上昇させるのだ⁵³。

これについては、先に述べたように表と裏をまさに表裏一体として考えなければならない現象である。確かに、7年間の開催期間の間に多くの小出版社が体制派の書籍市場に進出し、経営という面では確立を果たしていった。このことは、潜在的に対抗書籍見本市の存在の根幹を突き崩す要因にもなった。つまり、体制側のフランクフルト書籍見本市に対抗し、また同時に市場開拓をその大きな目標に掲げていた運動が、その開催意義を失ってしまうことになった。つまり開催理念としては、体制とみなされた書籍市場への抵抗と反対が第一の目標であったが、実際に参加した小出版社にとっては、対抗書籍見本市を通して、体制派に入り込む機会であったと考えられる。というのも、1968年当時から改革運動の動きが存在したフランクフルトという土地は、弱小出版社にとってお互いにネットワークを作り上げ、体制派とも接触する機会を提供する要因を秘めていたからだ。これまで述べてきた二つの側面は、当時のオルターナティブなものの全体が抱えたジレンマであるとも言える。

対抗書籍見本市が解体した要因は、次の機会に検討することとする。というのも新しい社会運動に見られる新たな運動形態が起こったこと、また政治情勢の変化、並びに書籍市場や出版市場の変化と絡みあう問題だからである。

3. まとめ

本稿で扱ったオルターナティブ・シーンと呼ばれる文化現象は、すでに過去のものであるという認識は決して成立することはないであろう。というのも、これらが巻き起こした変化は、80年代からドイツ社会を広く席卷し始めることになる新しい社会運動の確固とした土壌を培ったからである。また、あらゆる多様さを認める社会的認識を醸成したのもこの時代の名残であるといえよう。

本稿では、体制と見なされた書籍出版市場やフランクフルト書籍見本市と対抗書籍見本市の関係に目を向けてきた。対抗書籍見本市に託された開催意義には、二つの側面があり、それは肯定的にも否定的にも捉えることのできない事実であると言える。

53 Frankfurter Rundschau 9.10.1980: Vierte Frankfurter „Gegenbuchmesse“; Fliegenpilz, Polterzweg und Höllenzeit.

商業化した書籍出版市場に対抗し、オルターナティブ文化の活動家たちが集う場を築き上げよう、という意図のもとで開催され、小出版社や市場とつながりを持たない作家達が確立した市場に進出し、市場には欠けた新鮮さをアピールする機会を生み出し、市場に勢力を拡大するきっかけを作り出した。だが、そのことは対抗書籍見本市の意義を揺るがせる結果にも通じていた。対抗書籍見本市においてその経営基盤を確立した多くの出版社は、現在も多くドイツに存在するし、また多くの作家が自らの作品を世に出す機会を得て、現在に至っている。

多くのオルターナティブ文化から生まれた雑誌が全国規模とは言えないまでも、地方において今なお十分健在である。本稿で扱った対抗書籍見本市は、社会的、政治的枠組みでの様々な条件が、対抗世論を呼び起こし、対抗運動を促した時代に見られた一つのジャーナリズム現象であった。

参考文献

1 次文献

Börsenblatt 27.10.1974: Schatten-Dasein?; Kleinverlage und die Messe.

Börsenblatt 15.9.1978: Mehr als sechzig Kleinverlage; Informationsstand auf der »großen« Messe.

Buchreport 30.9.1987.

Deutsches Allgemeines Sonntagsblatt 20.10.1985: "Gegenbuchmesse – ein Nachruf".

Frankfurter Rundschau 12.10.1977: Klein bleiben, aber gemeinsam größere Wirkung erzielen; Ein Gespräch mit Peter Engel und Norbert Ney über die „Alternative Gegenbuchmesse“ und die Zukunft der Kleinverlage.

Frankfurter Rundschau 9.10.1980: Vierte Frankfurter „Gegenbuchmesse“; Fliegenpilz, Polterzweig und Höllenzeit.

Frankfurter Rundschau 10.10.1980: Eine Mehrheit, die kleine ist: Kleinere Verlage artikulieren sich auf Buch- und Gegenbuchmesse.

Katalog zur Gegenbuchmesse der Arbeitsgemeinschaft Alternativer Verlage + Autoren: VLdB; Verzeichnis lieferbarer alternativer Bücher. Trier 1978

Ruhr-Nachrichten 29.9.1977: „Gegenbuchmesse“ der Autoren.

Die Tageszeitung 28 8.7.1977: Messe der Mini-Pressen.

Die Zeit 19.10.1979 : Habichtskraut und Himmelschiff ; Momentaufnahmen der Gegenbuchmesse Momentaufnahmen der Gegenbuchmesse.

2 次文献

Arnold, Heinz Ludwig (Hrsg.) : *Literaturbetrieb in der Bundesrepublik Deutschland*. München 1981.

Estermann, Monika. Lersch, Edgar (Hrsg.): *Buch, Buchhandel und Rundfunk - 1968 und die Folgen*. Wiesbaden 2003.

Füssel, Stephan (Hrsg.): *50 Jahre Frankfurter Buchmesse 1949-1999*. Frankfurt.a.M. 1999.

Glaser, Hermann: *Kleine deutsche Kulturgeschichte von 1945 bis heute*. Frankfurt.a.M. 2004.

Görtemaker, Manfred: *Geschichte der Bundesrepublik Deutschland*. München 1999.

Hermann, Jost: *Die deutschen Dichterbünde: von den Meistersingern bis zum PEN-Club*. Köln 1998.

Hollstein, Walter: *Die Gegengesellschaft: Alternative Lebensformen*. Reinbeck 1981.

Holtz-Bacha, Christina: Alternative Presse. In: Jürgen Wilke(Hrsg.): *Mediengeschichte der Bundesrepublik Deutschland*. Bonn 1999. S. 331-349.

Rucht, Dieter: *Modernisierung und neue soziale Bewegungen*. Frankfurt.a.M. 1994.

Rucht, Dieter. Blattert, Barbara. Rink, Dieter: *Soziale Bewegungen auf dem Weg zur Institutionalisierung: Zum Strukturwandel >> alternativer << Gruppen in beiden Teilen Deutschlands*. Frankfurt.a.M. 1997.

Scheitler, Irmgard: *Deutschsprachige Gegenwartspoesie seit 1970*. Tübingen 2001.

Sontheimer, Kurt: *Zeitenwende?: die Bundesrepublik Deutschland zwischen alter und alternativer Politik*. Hamburg 1983.

Volpers, Helmut: *Alternative Kleinverlage in der Bundesrepublik Deutschland*. Göttingen 1986.

Wittmann, Reinhard: *Geschichte des deutschen Buchhandels*. München 1999.

日本語文献

野田宣雄 (編著) 『よみがえる帝国—ドイツ史とポスト国民国家—』 ミネルヴァ出版 1998 年

ヤン・ベルク (編著) 『ドイツ文学の社会史 (下)』 法政大学出版局 1989 年

北海道大学大学院文学研究科
博士課程